

ウル第三王朝時代ウンマにおけるシャラ神殿造営

前田 徹

はじめに

前3千年紀のメソポタミアにおいて、王権は、都市国家から領域国家、さらに統一国家の王へと進展した。統一国家の王権理念を最初に導入したのがアッカド王朝のナラムシンであり、統一国家的制度を整えたのが、アッカド王朝崩壊後に成立したウル第三王朝である。王権の二大権能である軍事権と祭儀権に関しては、都市国家分立期以来都市国家の支配者が保持し続けた軍団指揮権と、都市神を祭る特権を、ウルの王は剥奪し、独占した。祭儀権を掌握したウルの王のみが神殿造営を自らの功業として王碑文に書くことができ、都市国家期や領域国家期において碑文に神殿建立を誇示し得た諸都市の支配者は、ウル第三王朝時代になると、もはや神殿建立碑文を作ることはなかった。

このように述べるならば、王権理念とそれを体現する政治体制がウル第三王朝時代に完成したように見える。しかし、ウル第三王朝が中央集権体制であったとは言い難い。支配領域の外縁部を形成する朝貢国地域は、服属の証であるグナ貢納をウルの王に献上するにしても、独立した国家群から成る地域であった。中心地域の諸都市でも、軍事権を失い、ウルの王の上級祭儀権のもとに置かれたとしても、初期王朝時代以来の都市的伝統を堅持し、ウルの直轄領になること無く、自立性を保持していた。ウルの統治は自立的な諸都市の協力を得て、はじめて可能であった（前田2003）。本稿では、ウルの王の祭儀権に、諸都市がどのように関わっていたのかを、支配下都市のひとつウンマの都市神シャラのための神殿造営を事例に取り、考えてみたい。

ウル第三王朝第4代の王シュシンは、ウンマにシャラ神殿を造営したことを、治世最後の年である9年の年名と王碑文で誇示した。王の功業であるシャラ神殿建設の造営主体が何処にあったかを明らかにするために、資材や人員がどのように調達されたかをウンマの行政経済文書から検討する。それが、本稿の第一の目的である。さらに、次に示すようなシャラ神殿造営それ自体に関わる問題があり、それについても検討したい。

シャラ神殿の竣工は、年名にあるようにシュシン9年であるが、Frayneは、ウンマ文書の記事から、この神殿の定礎が据えられたシュシン2年がシャラ神殿建設の開始時期と見た（RIME 3/2, 294）。確かにシャラ神殿造営に関わる文書はシュシン2年から多く残り、シュシン7年まで文書に関連記事

を探ることが出来る。しかし、シュシン2年より3年前のアマルシン8年に、すでに、「シャラ神のエマフ神殿の聖所 (eš₃) を建てるためのシスクル祭儀」や「シャラ神殿を建てるために」という記事がウンマの行政経済文書にある。アマルシン8年の造営記事をどのように解釈するかが問題になる。

シュシンがシャラ神殿造営について書き残した碑文の内容にも、検討すべき問題が存在する。

「シャラ神、天において信頼厚き(神)、イナンナ神の愛する子、彼(シュシン)の父のために。

シュシン、アン神のイシブ神官、エンリル神とニンリル神と大いなる神々(に仕える)清浄な手を持つグダ神官、エンリル神が国土の牧夫として彼の心に選んだ王、強き王、ウル王、四方世界の王が、ティドヌンを遠ざけるマルトゥの城壁を造り、マルトゥへの道を彼の国土に再び開いた(マルトゥまで国土を安全にした)とき、エシャゲパダ神殿、彼(シャラ神)の愛する神殿を、彼(シュシン)の生命のために建てた。」(RIME 3/2, 328)

この碑文では2つが注目される。第一に、シュシン4年の年名「ティドヌンを遠ざけるマルトゥの城壁を造った年」に対応する「ティドヌンを遠ざけるマルトゥの城壁を造り、マルトゥへの道を彼の国土に再び開いた(マルトゥまで国土を安全にした)とき」の記事と、その5年後の9年の年名「シャラ神殿を造った年」に対応が可能な「エシャゲパダ神殿、彼(シャラ神)の愛する神殿を、彼(シュシン)の生命のために建てた」という記事が同一碑文に記載されていること。第二に、ウンマにおけるシャラ神の主神殿は通常エマフ (e₂-mah) と称されるのであるが、この碑文ではシャゲパダ神殿 (e₂ ša₃-ge-pa₃-da) とする点である⁽¹⁾。

第一の点について、フレインは、この碑文にある「シャラ神殿を造った」とは神殿造営の工事開始時期 (terminus post quem) を示すとした (Frayne 1981, 277-8)。つまり、9年に完成したシャラ神殿の造営は、「マルトゥの城壁を造ったとき」=シュシン4年に着工されたと看做す。この解釈の場合、フレイン自身が指摘しているように、シュシン2年に、既にシャラ神殿の定礎が据えられており、それとの整合性が問われる。

そもそも、シュシンが建て、9年に完成を祝ったシャラ神殿がシャゲパダであったとは確認されない。年名では、「ウンマのシャラ神殿を建てた年」もしくは「シャラ神殿を建てた年」であって、シャラ神殿の固有名エマフもシャゲパダも書くことがない。シュシンの王碑文にあるシャラ神のためのシャゲパダ神殿造営がシュシン9年の事績であるとするには、明白な証拠が欠ける。

フレインが示した新旧2つの解釈とは別に、次のように考えることも出来る。シャラ神殿建立がアマルシン8年に始まったことは行政経済文書から確認でき、8年に始まるシャラ神殿造営は、シュシンの王碑文にあるとおり、シャゲパダ神殿の造営作業であり、「マルトゥの城壁を造った年」を年名とするシュシン4年に完成した。一方、シュシン9年の年名にあるシャラ神殿とはエマフのことで、シャゲパダ神殿が完成した後に、建設が開始されたと。この解釈が正しいかを判断する材料を得るためにも、ウンマの行政経済文書に記録されるシャラ神殿造営記事を見て行くことにする。

I. アマルシン8年起工のシャラ神殿造営工事

神殿造営の工事過程をウンマ文書から整理する場合、参考になるのが、ウル第三王朝時代直前に在位したラガシュの王ウルバウの碑文にある、都市神ニンギルスのための神殿建立記事である (RIME 3/1, 19: ii 6-iii 7. Cf. Ellis 1968, 10-11)。

「我が主人ニンギルス神のために、地を [] クシュの (深さに) 掘り、その土砂を貴石のように選り分けた。銀のように火で浄めた。播種畝のように広い場所に置いた。その土砂を、その中に戻した。基台 (uš) を作り、その上に10クシュ (=5メートル) の基壇 (ki-sa₂) を作った。基壇のその上に、アンズバツバルのエニンヌ神殿を30クシュ (=15メートルの高さ) に建てた。」

ウルバウは、神殿を建てる場所の整地と清浄儀礼、基台造り、神殿が建つ基壇造りの順で記載する。ウンマの行政経済文書において、シャラ神殿造営のための整地・清浄儀礼は確認できないが、基台や基壇を造ることは記録されており、作業の進捗を知る手掛かりになる。

さて、シャラ神殿造営の最も早い記録は、既に触れたように、アマルシン8年3月の「シャラ神のエマフの聖所を建てるためのシスクル祭儀」である⁽²⁾。この記事は、シャラ神の神殿をエマフとするが、さらに聖所 (eš₃) と書き加えている。エマフ神殿内の一つの聖所が建てられたのであり、それが、シャゲバダ神殿である可能性がある⁽³⁾。シャラ神殿を建てるためのシスクル祭儀に呼応して、同じ3月の15日から、「王宮からシャラ神殿を建てるために来た建築師」に穀粉と植物油が支給されており⁽⁴⁾。専門の建築師集団が造営に従事した。

シャラ神殿造営の開始から3年後のシュシン2年、5月26日から9月5日まで、基壇 (ki-sa₂) のための定期奉納の穀粉が支出された (AnOr 1, 163)。6月には、「シャラ神殿の基壇のためのシスクル祭儀」の犠牲となる羊が支出された (BPOA 1, 741)。この6月には、基壇のシスクル祭儀と共に、基台 (uš) の完成を祝う犠牲家畜が支出され⁽⁵⁾、定礎 (鎮壇具 temen) も据えられた。先に引いたウルバウの碑文では、基台と基壇の整備は時間的に前後して書かれるが、シャラ神殿造営では、同時期に完成を祝っている。このように、アマルシン8年に始まるシャラ神殿造営において、重要な節目がシュシン2年6月に来る。

定礎については、「シャラ神殿の定礎を整えるため」のアスファルト⁽⁶⁾、同じくアスファルトと植物油が「聖所 (eš₃) の定礎を整えるために、シャラ神殿において支出」されている⁽⁷⁾。月の記載はないが、シュシン2年には、「シャラ神殿において、定礎に納める e₂-^dsara₂-ka temen<-aš> si-ga」ための、穀粉 (UTI 3, 1837) と、エレン杉 eren, シュルメ樫 šu-ur₂-me, ザバルム杉 za-ba-lum (TCL 5, 5680) が支出された。別に、定礎に納める布 (gada) の支出記録もある (BPOA 1, 732)。

定礎について、ウル第三王朝時代直前のラガシュの支配者グデアは、エニンヌ神殿建立碑文において言及する。建築終了間近に、「(エニンヌ) 神殿において、エンキ神は定礎を納めた。エリドゥ

の娘ナンシエ神は、予兆を念入りに読んだ」と書く (RIME 3/1, 82: xx 15-16)。建てられた神殿が永久に崇高であることを願って、定礎が納められた。グデアは、この建立碑文の違う箇所、次のように書く。

「エンシ (=グデア) は神殿を建てた。それは伸び上がる。大いなる山のように広く伸び上がった。その定礎はアブズ (に根を張り)、大いなる帆柱のごとく地 (中から地上に向かって) 積み上げられた。(定礎は) エンキ神に (アブズの) エンゲル神殿で忠告を聴く。天 (に達する) 定礎は英雄であり、神殿を保持する。」 (RIME 3/1, 83: xxii 9-14)

シュメール人は、世界を、神々が住む天と、生命の泉がある地下、それらに挟まれた地上に人間世界があると考えた。グデアは、神殿の頂は神々の世界である高き天に達し、根は深く生命の泉がある地に据えられたことを強調した。そのことを、グデアは、神殿そのものでなく、定礎によって示した。定礎は神殿にとって特別な意味を持つのである。

定礎を基壇に埋めることが神殿建設にとって必要不可欠であり、シャラ神殿造営において、基台や基壇を固め、定礎を納めたシュシン2年6月が一つの区切りになる。ただし、現代とは異なり、定礎を置くことが、工事の終りを意味することはない。シュシン2年の後半にシャラ神殿の造営に従事する者の記録があるので⁽⁸⁾、定礎が埋められた6月以降も建築作業は継続していたことは確かである。定礎を置くことは、巨大化しその築造には多大の人員を要した基台と基壇の完成と、次に続く神殿本体である建物の建設の間に行われたのである。

基壇が完成した後、神殿本体の竣工まで、どれほどの時間を要するのか。神たる王アマルシンのためにウンマに造られた神殿では、アマルシン6年6月に基台が完成し、その後、神殿本体の建設であるレンガ積み工事 (al-tar) を経て、翌7年7月に神殿は完成し、「御座所に坐ったアマルシン神」を祝った⁽⁹⁾。アマルシン神殿の定礎が置かれたアマルシン6年から、ウンマでは、7月の月名としては、従来の itu min-eš₃ に加えて、「神たるアマルシンの祭の月」を用いた。新しく定められた7月の月名「アマルシンの祭の月」に相応しく、この月に神たるアマルシンが新神殿に入ったのである。

アマルシン神殿の完成が、基台整備から1年後であるので⁽¹⁰⁾、シャラ神殿も、基台・基壇と定礎が据えられたシュシン2年6月から1年後か2年後に竣工した可能性がある。竣工の祭の候補になるのが、「シャラ神殿のシスクル祭儀」である。シュシン3年5月に、シャラ神殿のシスクル祭儀のための穀粉などをニップルへ運んでおり⁽¹¹⁾、同11月にもシャラ神殿のシスクル祭儀用のナツメヤシなどが支出された⁽¹²⁾。類似の祭儀、「シャラ神のシスクル祭儀」や「シャラ神殿の中でのシスクル祭儀」が文書で確認できるが、それらは、シャラ神やシャラ神殿内の神々を対象とした祭儀であり、シャラ神殿そのものを対象にしたシスクル祭儀ではない。シャラ神殿を対象にしたシスクル祭儀は、シュシン3年にしか確認できない。

シュシン3年に2度行われたシャラ神殿のシスクル祭儀のうち、5月のそれは、基台と基壇が完成し、その上に築かれる神殿本体の建設が進んでいることを、最高神エンリル神に報告するためにニ

ップルで行われた祭儀であると考えられる。5月のシスクル祭儀のあと6月に、王は、戦争で獲得した奴隷をシャラ神に献納した（前田2006）。これも、シャラ神殿造営の進捗状況と関わるのであろう。それから半年後、シュシン3年も末近く11月に行われたシャラ神殿のシスクル祭儀は、翌4年に連続するシャラ神殿竣工祝いの一環としての祭儀と思われる。

竣工儀式と関連すると思われるシスクル祭儀がシュシン3年11月に行われたが、12月に、大門（ e_2 ka₂-mah）に木材が運ばれている⁽¹³⁾。神殿の門について、先に引用したグデアのエニンヌ神殿建立碑文では、建築作業の最後に、神殿の出入り口である7つの門を建設し、その7つの門について詳細に記述する（RIME 3/1, 85: xxv 24-xxvi 14. Cf. Heimpel 1996）。ウンマ文書にはシャラ神殿の門とは明記されていないが、グデアの場合と同じく、神殿本体の仕上げとして、最後にシャラ神殿の主門が造られたと考えられる。

アマルシン8年に始まったシャラ神殿エマフ内のエシュ（聖所）の建設は、シュシン2年6月に定礎が置かれ、神殿本体の建設を経て、シュシン3年12月に最後の工事として、正面の大門がエリン杉などで飾られ、竣工を見たのである。シュシン4年にシャラ神殿が竣工していたであろうことは、この年に、シャラ神のためのマグル船が建造されたことから（Or 47/49, 420）、确实視される。アマルシン神殿が完成したとき、アマルシンの御座舟であるマグル船が造られているので、シャラ神のマグル船建造は、シャラ神の新神殿の完成に関連した作業であると考えられるからである。

このように見てくれば、シュシンの王碑文に、4年の年名に採用された「マルトゥの城壁」建設と並んでシャラ神のシャゲバダ神殿を建てたとあることは、書かれた通りに理解して、シュシン9年の年名に採られたシャラ神殿造営でなく、シュシン4年に完成したシャラ神のための神殿を指すと言うことが出来る。ただし、引用したシュシンの王碑文が定礎（鎮壇具）として基壇に埋められたものであるならば、この説は成立しない。定礎を埋めることはシュシン4年でなく、それより2年前のシュシン2年に行われたからである。その点を確認したい。

定礎碑文については、初期王朝時代アダブの王の碑文にある、「(ディンギルマフ神のために) エマフ神殿を建てた。その基台において、地に向かって定礎を納めた e_2 -mah, mu-na-du₃, ur₂-bi ki-še₃, temen ba-si」が参考になる。個々に示した同文の銘がある青銅板、石板、それに青銅製くわの刃が、鎮壇具としての定礎碑文（temen）であると考えられる（ABW 2, Adab Eig 1）。さて、Frayneによれば、シャラ神殿造営を記したシュシン王碑文は3種類ある（RIME 3/2, 326-329）。シャラ神殿の造営をマルトゥの城壁建設と共に記す碑文は8個の遺物に書かれており、石塊の断片4、門柱の軸受け3、不明1である。マルトゥの城壁に触れないで、シャラ神殿の造営のみを記す2碑文は、1つが門柱の軸受けや石塊に書かれ（Shu-Sin 17）、もう一つが黒色蛇紋岩で造られた板状の碑である（Shu-Sin 18）。これらの碑文の出土状況は分かっていない。ウンマ遺跡は正式に発掘されておらず、遺物の出土状況の記録が無いからである。

黒色蛇紋岩で造られた板状の碑が鎮壇具である可能性があるが、その銘文はマルトゥの城壁に言

及しないので、シュシン2年に埋められた定礎碑文であっても何ら問題がない。鎮壇具と推定できる碑文の他は、鎮壇具として埋められたのではなく、シャラ神殿の門に設えた扉柱の軸受けなどとして使用されたと考えることができる。シャラ神殿の門は、建設作業の最後としてシュシン3年末から工事が行われているので、扉柱の軸受け石にシャラ神殿造営とマルトゥの城壁建築を書き記した碑銘があっても、時間的には、何ら不適合な点はない。

このように見てくると、アマルシン8年に始まる建設作業は、エマフ神殿内にある一つの聖堂の建設であり、その聖堂がシャゲパダと命名されたシャラ神殿であると結論付けられる。

II. シュシン9年竣工のシャラ神殿造営工事

ウル王シュシンは、功業たるシャラ神殿建立を9年の年名で誇示する。それに関連して、シュシン5年、6年、7年にシャラ神造営関係の労働文書がある⁽¹⁴⁾。しかし、シュシン3年と4年にシャラ神殿建設に直接関わる文書を見つけれないし、なぜかシュシン8年にもシャラ神殿造営に関わる文書がない。アマルシン8年の文書にあった神殿建設の起工式のような儀式を探すことも出来ない。

シュシン4年以降においてシャラ神殿造営に関する文書は少ないが、シュシン9年の完成祝いに関係すると思われる文書はある。シスクル祭儀用の木製卓をシャラ神殿に納める記録であり⁽¹⁵⁾、この卓は、シャラ神殿の完成を祝う祭に使われたと思われる。

もう一枚は、神々へ羊・山羊を奉納する記録SANTAG 6, 332であり、末尾近くで、後半が欠けているが「シャラ神が彼の神殿にはいられた(とき) ^dšara₂ e₂-na k[u₄-ra ---]と読める。シャラ神殿が完成し、シャラ神が神殿に戻ったときの祭儀の記録である。末尾に破損があり、年名が読めないのも、シュシン9年の文書と断定することは出来ない。シュシン4年に行われたシャラ神殿シャゲパダの竣工式に関わる文書の可能性もあるが、ここでは、シュシン9年の文書として扱いたい。

この文書は、家畜の収入と支出を記録するが、支出の項のみを示した。家畜の奉納を受ける聖所や神々は、ウンマの「神々の定期奉納」に現れる神々とは異なっており、第一に挙がるのはアブズ ab-zuである。アブズは地下にある生命の泉のことで、シュメール人は、神殿の定礎を置くとき、それは地下深くアブズに根差すことが必要で、そのことで神殿の永遠性を保証すると考えていた。アブズが最初に奉納を受けることは、この記録が神殿の竣工の儀式に関わると考えられる一つの根拠になる。

1 子羊 3 山羊	ab-zu	3 山羊	^d a-nun-na didli
1 子羊	^d en-ki ša ₂ e ₂ -a	8 羊	igi-e ₂ -a-še ₃
5 子羊	an a ₂ še-ri-da	1 子羊	^d nin-gi ₆ -par ₄
1 羊	bara ₂ an-na	1 羊	bara ₂ ^d en-lil ₂ -la ₂

1 羊	^d igi-zi-bar-ra	6 山羊	^d lama-lugal ša ₃ e ₂
2 子羊	^d lama- ^d šu- ^d suen	1 子羊	^d gu-la
1 子羊	^d dumu-zi URUxA-a	14 羊・山羊	e ₂ ^d šara ₂ -ta gur-ra

アブズのあと、集合的に扱われるアヌナ神への奉納があり、さらに、アブズの主人であるエンキ神へ奉納がある。エンキ神は、神殿の内 (ša₃ e₂-a) で1頭の羊、神殿の前で (igi-e₂-a-še₃) 8頭の羊の奉納を受ける。この文書に記録された奉納においては、エンキ神への奉納が中心になっている。

そのあとは、大いなる神々アンとエンリル、豊饒に関わるニンゲパルとイギジバルラとドウムジなど、多くの神と聖所に犠牲を捧げている。これらの神に奉納することで、新神殿の安寧を祈願したのであろう。

神とされた王は、集合的に「守護神たる王^dlama-lugal」とされ、6頭の山羊の支出とは、シュルギ、アマルシン、シュシンの3神王に対するそれぞれ2頭の山羊の合計である。シュシンは、この文書の別の箇所、「守護神たるシュシン^dlama-^dšu-^dsuen」として、2頭の子羊の奉納を受けている。神たる王シュシンが2箇所て祭られるのは、現時点ではイッピシン1年に確認されるのみで、シュシン治世の文書に確認できない。そのことから、この文書を、シュシン4年でなく、シュシン治世最末年の年である9年と措定した。

シュシン4年のシャゲパダ神殿の竣工と9年のシャラ神殿の完成とが、どのような関係をもつのか。現時点では、ウンマの都市神シャラ神の主神殿であるエマフ神殿の大改築が意図され、その一部として4年にシャゲパダ神殿の竣工を先行的に祝い、最終的に全体の改築が終わった9年に年名として顕彰したと考えておきたい。

III. 建築師集団

シャラ神殿の造営が開始されたアマルシン8年に、「王宮からシャラ神殿を建てるために来た建築師」へ植物油と食用の穀粉が支給されたことは既に指摘した。ウンマ文書において、王宮は、ウルの王に関連する組織を表現する。この建築師集団は、ウンマの公的経営体に属するのではなく、ウルの王から特別に派遣されてきた職人である。彼らは、王に属する建築師であるが、人名の多くが、イギアム神、パウ神、ニンマルキ神など、ウンマに隣接するラガシュの神々の名を含むので、ラガシュで編成された建築師集団であることは間違いない。ラガシュで編成された建築師集団が、王直属になり、王の命令で各地で作業に従事したのである。

この建築師集団は7年後のシュシン6年にも、シャラ神殿造営のために王宮から派遣されて来た。この時期、アマルシン8年に始まったシャラ神のためのエシャゲパダ神殿の造営は終わっているので、彼らの派遣は、シュシン9年に完成を祝うシャラ神殿の造営のためである。つまり、王は、神殿造営の初期に、直属の建築師集団を派遣してきたのである。

シュシン3年と4年のウンマ文書に、シャラ神殿造営工事の記録を見つけることが出来ないので、5年が開始時期と考えるのが妥当である。つまり、9年に完成するシャラ神殿の造営は、シュシン5年から始まり、6年、王宮からの建築師集団の指導のもとに、工事が本格化したのである。

王直属の建築師集団が、シャラ神殿造営に重要な役割を果たしたにしても、彼らが工事に従事したのは限られた期間であった。建築師集団の構成を見ると、アマルシン8年に記録されたウンマのシャラ神殿建設に従事する建築師集団は4区分され、建築師長のウレイギアリムが筆頭に来る。第二がナムマフバウで、なぜか職名を明記されない。現場監督のナムマフバウは、記録された3月から8月までの全期間を通して受給するが、建築師長のウレイギアリムは、終盤、7月17日から8月25日までの38日間のみ受給であった。建築師長は、現場に常駐することなく、この集団に従事する最終期日近くに作業の最終行程を確認するためにウンマに来たのである。現場監督のナムマフバウの下に、7人の建築師が並び、これが第三のグループである。彼らは3月15日から7月末までの4ヶ月半、従事した。第四は、名を書かれることはないが、7月に受給する20人、8月に受給する24人の集団である⁽¹⁶⁾。この建築師集団は、シャラ神殿造営の特定期間のみ仕事をしたと考えられる。

王直属の建築師集団に限られた期間働いたのに対して、全期間を通じて労働に従事するのはウンマの人々である。例えば、シュシン2年後半に、「建築師として、シャラ神殿（建設に）従事した」者は、建築師と書かれているが、王が派遣した建築師集団のような専門の建築師ではない。彼らは、直営地を耕作する耕作集団の長である nu-banda₃-gu₄ 職のイドパエとイシャルムの配下にあった。つまり、本属の耕作集団から離れて、一定期間、シャラ神殿造営において建築作業に就く者である。

シャラ神殿造営では文書から確認できないが、アマルシン神殿造営に際して、ウンマの女性を含めた広い範囲の人々が作業に従事している。例えば、文書管理人ウルシャラ、ビール醸造人の長ビドゥガとルトウルトゥル、木製品の管理責任者アグ、犠牲家畜の管理責任者カスなどを長とする集団 (SETUA 71) や、織物工房と製粉工房に働く女性も従事した (UTI 3, 2167; MVN 5, 57; TCNY 138)。上は都市支配者から下は工房に働く女性まで、広くウンマ各層の者が関与して、神殿造営は遂行されたのである。王の功業となる神殿造営であるが、ウンマの人的資源に支えられて完成したのである。

IV. 資材管理者ルガルニル

シャラ神の造営に関わる資材がどのように調達され、管理されていたのか。それを知る一つの手がかりになると考えられる人物が、ルガルニルである。ルガルニル lugal-nir は文書管理人ウルシャラの子であるが、父の職務を継承しないで、ウンマ市区にあるシャラ神殿への奉納 (mu-tum₂^dsara₂) 物を管理する役に、アマルシン8年に就いた。シャラ神に奉納された、羊や牛などの家畜、羊毛、葦、銀、石材などの物品、さらには人間（奴隷）や、地所であるナツメヤシ園などを、ルガルニルは管理し、再配分を行った。ルガルニルは、シャラ神への寄進だけでなく、早くから、シャラ神殿

に必要な物資を受領する役割も果たしていた。たとえば、アマルシン9年には、商人のウルドゥムジから「シャラ神殿を擦る（壁の補修？） $e_2-d_4sara_2-ka-ke_4$ ba-ab-su-ub」ためにアスファルトを受け取っている（YOS 18, 123）。シュシン5年以降にはシャラ神殿造営に関しても物品や労働を管理している（前田2000注26）。これは、シャラ神殿内の物品を全般的に管理する彼の役割から派生した任務であると理解される。

ルガルニルの活動はシャラ神殿に限定されないで、一見シャラ神殿とは無関係な現業施設であるマルサや工房にも関与した。マルサは造船所のような施設と考えられており、関連する多くの作業所も付属していた。そのマルサについては、ルガルニルはシュシン1年から関与している（前田2000注14）。

ルガルニルの活動の場は、シュシン6年には、工房 $giš-kin-ti$ にも拡大していた。ウンマ文書に記録される工房のほとんどは王都ウルにあった工房を指し、ウンマから送られた資材を記録する。ルガルニルが関与する工房は、ウルのそれだけでなく、ウンマ市内の工房であり、記録は、現在のところシュシン6年と7年の文書に限定される⁽¹⁷⁾。これらの文書のなかで特に注目されるのは、シュシン5年1月から7年1月までシャラ神の工房で鍛冶工として働いた人物の記録文書に捺印することである（TYBC 1826）。この鍛冶工がシャラ神の工房で働き始めたシュシン5年は、シュシン9年に完成するシャラ神殿の造営が始まったと推定される年であり、鍛冶工の就役期間との関連が注目される。ルガルニルがマルサや工房に関与するシュシン5年以降に、その役割としてシャラ神殿造営に関わっていたと推測される。

ルガルニルが、マルサ、工房、それにシャラ神殿造営に重要な役割を果たすのはシュシン5年以降であり、アマルシン8年に始まり、シュシン4年に完成を見たシャゲバダ神殿の造営時期には未だそうした活躍を見せていない。神殿造営は、物品管理者ウルシュルパエなどの活動から見て、従来から機能していたウンマの行政経済組織を使って資材を管理していたと考えられる。それが、5年以降のシャラ神殿造営の進捗によって、資材集積所・補給所としてのマルサと、職人の工房をも一元的に統括するシステムを導入した。その統括者としてルガルニルが置かれたと考えることが出来る。

おわりに

以上、シャラ神殿造営について検討してきたが、ウルの王シュシンが自らの王碑文にシャラ神殿の造営を誇示し、さらにシュシン9年の年名にも採用したことから、ウルの王の主導のもとにシャラ神殿が造営されたことは確かである。しかし、シャラ神殿建築作業に王が直接関与するのは、王宮の建築師を派遣したことぐらいである。工事のための人員や資材はウンマで準備されており、その作業を監察するためにウルから派遣され、ウンマに常駐する人物の存在は、文書から確認できない。なによりも、神殿造営の人員、資材補給所としてのマルサ、それにシャラ神の工房が、一人の人物ルガルニルによって統括されていることは、シャラ神殿造営における全責任はウンマ側にあっ

たと言える。ウンマの支配者（エンシ）は、節目節目の祭儀に関する文書において、捺印者や物品の支出者として書かれているので⁽¹⁸⁾、神殿造営の全般を監督する地位にあったことは間違いない。

シュシン2年6月に基台や定礎が据えられたとき、王直属の建築師集団の長ウルイギアリムと將軍のルディンギルラが登場する。建築師集団の長ウルイギアリムは、作業過程の重要な場面にウンマに来ており、基台や定礎の設定とその祭儀は神殿造営の節目であるので、参加したと考えられる。將軍ルディンギルラも、基台・基壇、定礎の祭儀に関わる。ウンマ文書から証明されないが、神殿建立など多大な労働を要する場合、周辺諸都市や軍団から人員が派遣されたことは疑えない。しかし、將軍ルディンギルラが軍団を率いて恒常的にシャラ神殿造営の任に当たっていたとは考え難い。彼がウンマ文書に記録されるのは、1例を除いて、シュシン2年の基台・基壇、定礎の祭儀に関わる文書である。他の一つは、やはり、シュシン2年の文書で、將軍ルディンギルラの家に行った者への贈り物を記録する⁽¹⁹⁾。シャラ神殿の基台・基壇、定礎の儀式において、王の名代という大任を果たした將軍への答礼であると推測される。少なくとも、この文書から、將軍ルディンギルラは、シュシン2年8月までにウンマを離れ、ウルカ軍団所在地に戻っていたと考えられる。彼が、ウンマに常駐し、シャラ神殿造営を監督するという職務に就いていたとは考えられない。このように、現時点では、ウルの王が派遣してきた総監督的職務を果たす人物は確認できない。人員・資材をはじめ、工事の進行もウンマ側が責任を持って行ったのである。ウルの王が誇示する神殿建立も、支配下諸都市の多大な負担によって初めて実行可能なものであり、完成させることが出来たのである。

本稿は、平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究C）「シュメールにおける統一王権と都市支配者」（研究課題番号15520460）の研究成果の一部である。

註

- (1) シャラ神殿にシャゲバダと命名された神殿があったことは、神殿リスト（K 4224+）92ff に、
 e_2 -mah [E₂^d]šara₂ e₂ bur-sig₇-sig₇ [E₂ 2] e₂ bur-du₃-du₃ [E₂ 3]
 e_2 ša₃-ge-pa₃-da [E₂ 4] e₂ u₄-sakar-ra [E₂ 5]
 とあることから確認できる（Frayne1981, 284 n.32. George 1993, 18, n.143）。
- (2) UTI 3, 1627: siskur₂ eš₃ e₂-mah^dšara₂ du₃-de₃.
- (3) アマルシン8年には、月の記載はないが、1頭の羊を en-en^dšara₂, e₂ ki-ša₆ bal-a, mu e₂-^dšara₂ du₃-da-še₃ するために支出する記録がある（Or 47/49, 377）。「シャラ神の神官達へ、神殿を、よき場所に転換された神殿、シャラ神殿を建てるために」と解釈でき、ウルバウの碑文にあるような、神殿建設地の整地と浄めを指すと考えられる。しかし、en-enとは通常、死者となった祖先達を集合的に指示する意味に使用され、神官達と訳すことが躊躇され、また、e₂ ki-ša₆ bal-aの正確な意味は不明である。
- (4) UTI 5, 3174: ša₃-gal šidim, e₂-gal-ta e₂-^dšara₂ du₃-de₃ gin-na.
- (5) 「シャラ神殿の据えられた基台の用品（nig₂-dab₃ uš ki-ga₂-ra e₂-^dšara₂-ka）」として牛と羊・山羊が支出されている（AAICAB I, 4, 418 [SS 2 vi]）。
- (6) MVN 15, 26: e₂-temen-na e₂-^dšara₂-ka du₃-de₃.
- (7) Cooper. ASJ 7, 30: e₂-temen-na eš₃ du₈-[de₃], zi-ga e₂-^d[šara₂]-ka.

- (8) YOS 4, 178: I bu e₃-u₂-ga, I ur-^dsul-pa-e₃, šidim-me, e₂-^dsara₂-ka gub-ba, itu-ri-ta, itu ^dli₃-si₄-še₃, ugula i-šar-ru-um, DUB dingir-ra; MVN 13, 283: I šeš-an šidim, itu-ri-ta, itu ezem-^dsul-gi-še₃, e₂ ^d[sara₂] gub-[ba], ugula id₂-pa-e₃, DUB dingir-ra.
- (9) 基台の完成: BIN 5, 48 [AS 6 vi] uš-ki-ga₂-ra e₂ ^damar-^dsuen-ka. レンガ積み工事: MVN 13, 760[AS 6 vii] altar du₁₁-ga a-ra₂ 3-kam, e₂ ^damar-^dsuen-ka. 御座所: SANTAG 6, 176 [AS 7 vii] ^damar-^dsuen bara₂-ga tuš-a.
- (10) アマルシンの父シュルギも神格化され、ウンマに神殿があった。シュルギの新神殿はシュルギ45年に完成しており、シュルギが新神殿に入り、祝宴がもたれた (TCL 5, 5671)。基台工事は、シュルギ40年に記録されているが、その完成が何時であったかは不明である。従って、基台の完成から神殿竣工までの期間を限定することは出来ない。
- (11) MVN 1, 35: 5 sila₃ zid₂, 2 sila₃ zu₂-[lum], 4 sila₃ eša, 0.0.1. 4 sila₃ dabin, 8 sila₃ ninda, 0.0.1. še-gur-sal₄-la, siskur₂ e₂-^dsara₂ ^dnibur^{ki}-še₃, ki ^dsara₂-kam-ta, DUB ensi₂-ka, itu ri mu-us₂-sa ma₂ ^den-ki ba-ab-du₃. siskur₂ e₂-^dsara₂ ^dnibur^{ki}-še₃ は、「(穀粉などを) ニップルのシャラ神殿のシスクル祭儀のために」とも読めるが、ニップルにシャラ神殿が建てられていたことは確証されないので、この訳を採らない。
- (12) TCNY 44: 1 gir₃-lam zu₂-lum 5 sila₃, 1 gir₃-lam giš.IB₂-X 5 sila₃, 10 šu-gur₃ zu₂-lum 1 sila₃-ta, siskur₂ e₂ ^dsara₂, ki lu₂-ga-ta, DUB ensi₂-ka.
- (13) TYBC 1398; MVN 13 259. 両文書で、円筒印章銘が異なる。MVN 13 259: na-ba-ša₆ šidim/ dumu lugal-gar-lagar-e/; TYBC 1398: na-ba-ša₆ / dumu lugal-nesag₂-e/. どちらかの誤読である可能性が高い。
- (14) 「(建築師)、シャラ神殿 (の造営に) 従事 e₂ ^dsara₂-ka gub-ba」(YOS 4, 176[SS 5 iv-ix])、「シャラ神殿の造営に従事する(者) e₂-dim₂ gub-ba, e₂-^dsara₂」(CST 555 [SS 6 iv-xiii], TYBC 1663 [SS 6 iv-xiii], YOS 4, 177[SS 7 iii-xii])、「シャラ神殿 (の造営に) 従事する建築師 šidim e₂-^dsara₂ gub-ba」(MVN 13, 371[SS 6 x-xii]) .
- (15) CST 589: ⁶⁵bašur-siskur₂-ra e₂-^dsara₂-še₃ ur-am₃-ma i₃-du₈ šu ba-ti.
- (16) シュシン6年に記録された建築師集団の人員をアマルシン8年のそれとを比較すると、統括者ウルイギアリムと、その下で実際の作業を指揮するナムマフバウは変わらない。アマルシン8年では、ナムマフバウの下で7人の建築師が一つのグループを作っていたが、シュシン6年にそのグループがなく、代わりに2人の建築師の頭が受給している。建築師の頭の2人は、もとは7人のグループに属した建築師であったと思われる。シュシン6年になると、ナムマフバウの下に2人の小頭を置いて、この2人が各々20人程度の建築師を統率する明確な2隊制になっていた。
- (17) 前田2000注15。それ以後に公刊された文書として、TYBC 1691: シュシン6年に、ビールや穀粉がシャラ神の工房のシスクル祭儀用に支出された。それは「初穂の祭」の一部であり、エンシの命令によった。捺印者はルカルラと書かれるが、実際に捺されたのはルガルニルの印章である。TYBC 1815: 工房とは明記されないが、シュシン7年の、職人 (gašam) への支給大麦をルガルニルは受領する。
- (18) Or 47/49, 377[AS 8] en-en ^dsara₂, e₂ ki-ša₆ bal-a, mu e₂-^dsara₂ du₃-da-še₃, DUB ensi₂-ka; BPOA 1, 1129 [SS 1] ša₃-gal šidim e₂ ^dsara₂-ka gub-ba, DUB ensi₂; SANTAG 6, 244[SS 2] šitim e₂ ^dsara₂-ka gub-ba ib₂-šeš₄, DUB ensi₂-ka; AAICAB 1, 4, 418 [SS 2 vi] nig₂-dab₃ uš ki-ga₂-ra e₂-^dsara₂-ka, gir₃ ur-^dig-alim šidim-gal, lu₂-dingir-ra šagina maškim, DUB ensi₂-ka; BPOA 1, 741 [SS 2 vi] siskur₂ ki-sa₂-a e₂ ^dsara₂-ka, DUB ensi₂-ka; MVN 1, 3511 [SS 3 v] siskur₂ e₂-^dsara₂ ^dnibur^{ki}-še₃, DUB ensi₂; TCNY 44 [SS 3 xi] siskur₂ e₂ ^dsara₂, DUB ensi₂.
- (19) BPOA 1, 522 [SS 2 viii] 1 udu igi-kar₂ du-u₂-du [igi-d]u₈?, lu₂ e₂ lu₂-dingir-ra agina-e₃ im-gin-na, ki a-lu₅-lu₅-ta, DUB ensi₂-ka

略号と参考文献

- AAICAB I: J.-P. Grégoire, *Archives administrative et inscriptions cunéiformes de l'Ashmolean Museum et de la Bodleian Collection d'Oxford, I*: Paris, 1-4, 1996-2002.
- ABW 2: Steible, H., *Die altsumerischen Bau- und Weihinschriften 2*, Stuttgart 1982.
- AnOr 1: N. Schneider, *Die Drehem- und Djoha-Urkunden der Strassburger Universitäts- und*

- Landesbibliothek*, (Analecta Orientalis 1), Roma, 1931.
- BIN 5: G. Hackman, *Temple Documents of the Third Dynasty of Ur from Umma*, (Babylonian Inscriptions in the Collection of J.B. Nies 5), New Haven, 1937.
- BPOA: T. Ozaki & M. Sigrist, *Ur III Administrative Tablets from the British Museum*, 1-2, (Biblioteca del Proximo Oriente Antiguo 1-2), Madrid 2006.
- Cooper, ASJ 7: M. Cooper, "The Dyke College Texts," *Acta Sumerologica* 7, 1985, 97-128.
- CST: T. Fish, *Catalogue of Sumerian Tablets in the John Rylands Library*, Manchester, 1932.
- Ellis 1968: R.S. Ellis, *Foundation Deposits in Ancient Mesopotamia*, New Haven.
- Frayne 1981: D.R. Frayne, *The Historical Correlations of the Sumerian Royal Hymnes (2400-1900 B.C.)*, Ph.D. dissertation, UMI Ann Arbor.
- George 1993: A.R. George, *House Most High. The Temples of Ancient Mesopotamia*, Winona Lake.
- Heimpel 1996: W. Heimpel, "The Gates of the Eninnu," *Journal of Cuneiform Studies* 48, 17-29.
- MVN: Materiali per il Vocabolario Neosumerico.
- MVN 1: G. Pettinato, & H. Waetzoldt, *La collezione Schollmeyer*, Roma 1974.
- MVN 5: E. Sollberger, *The Pinches Manuscript*, Roma 1978.
- MVN 13: M. Sigrist, D.I. Owen, & G.G. Young, *The John Frederick Lewis Collection*, Part II, Roma 1984.
- MVN 15: D.I. Owen, *Neo-Sumerian Texts from American Collections*, Roma 1991.
- MVN 18: M. Molina, *Tablillas Administrativas Neosumerias de la Abadía de Montserrat*, Roma 1993.
- Or 47/49: N. Schneider, "Die Geschäftsurkunden aus Drehem und Djoha in den Staatlichen Museen (VAT) zu Berlin in Autographie und mit systematischen Wörterindices herausgegeben," *Orientalia Series Prior 47/49*, 1930.
- RIME: Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Period.
- RIME 3/1: Edzard, D.O., *Gudea and His Dynasty*, Toronto 1997.
- RIME 3/2: Frayne, D.R., *Ur III Period (2112-2004 BC)*, Toronto 1997.
- SANTAG 6: N.V. Koslova, *Ur III-Texte der St.Petersburger Eremitage.*, Wiesbaden, 2000.
- SETUA: S.T. Kang, *Sumerian Economic Texts from the Umma Archive*, Urbana, 1973.
- TCL 5: H. de Genouillac, *Textes économiques d'Oumma à l'Époque d'Our*, (Textes cunéiformes du Musée du Louvre 5), Paris, 1922.
- TCNY: H. Sauren, *Les tablettes cunéiformes de l'époque d'Ur des collections de la New York Public Library*. Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain 19, 1978.
- TPTS: M. Sigrist, *Tablettes du Princeton Theological Seminary, Époque d'Ur III*, Philadelphia, 1990.
- TYBC: M. Sigrist, *Texts from the Yale Babylonian Collections*, 2 Parts, (Sumerian Archival Texts, 2-3), Bethesda, 2000.
- UCP 9/2, 2: H. F. Lutz, "Sumerian Temple Records of the Late Ur Dynasty," *University of California Publications in Semitic Philology* 9, II-2, Berkeley, 1928.
- UTI: F. Yildiz, & T. Ozaki (Gomi), *Die Umma-Texte aus den Archäologischen Museen zu Istanbul*, 3-6, Bethesda, 1993-2000.
- YOS: Yale Oriental Series.
- YOS 4: C.E. Keiser, *Selected Temple Documents of the Ur Dynasty*, New Haven 1919.
- YOS 18: D.C. Snell, & C. H. Lager, *Economic Texts from Sumer*, New Haven 1991.
- 前田 2000: 前田徹「ウル第三王朝時代ウンマ文書からみたマダガのアスファルト」『西南アジア研究』第53号、76-89頁。
- 前田 2003: 前田徹『メソポタミアの王・神・世界観—シュメール人の王権観』山川出版社。
- 前田 2006: 前田徹「ウル第三王朝時代ウンマ文書における王のサギ」『早稲田大学文学研究科紀要』第50輯第4分冊、35-48頁。